

伝統繋ぐ愛宕祭 ～関大生による立山づくり～

江戸時代から約300年続く、火伏の神を祀る「愛宕信仰」。旧街道の交わるまち、奈良県・大和八木の愛宕祭を盛り上げるため、関西大学の学生が活動しています。



2016年 関西大学（八木ラボ）の立山

活動の概要

目的	伝統ある愛宕祭の興隆および次世代への継承
連携メンバーおよび役割	八木まちづくり協議会…活動場所の提供、奉賛会との取り次ぎ、現場調整 大和八木地区の地域の方々…学生メンバーへの各種協力、材料提供、機材提供、差し入れ 関西大学環境都市工学部 岡絵理子ゼミ / 環境都市工学部建築学科学生 …立山の企画・制作、八木ラボの運営、祭設営の手伝い
活動地域	奈良県橿原市大和八木地区
活動期間	2010年～（継続中）
費用	奉賛会からの立山作成費

連携の経緯

橿原市八木地区との連携は地域を分断する都市計画道路に関する受託研究を受けたことに始まる。同地区の地域の人々が誇りをもって守り続けていた「愛宕祭」では、地域の祠のお供えとしてつくられる「立山」が減り、「立山」をつくることの出来ない町内が多く存在する。そこで、町内の人々に代わって、岡研究室のゼミ生や建築学科に在籍する有志学生が集い、「関西大学 八木ラボ」として八木地区の愛宕祭に参加することとなった。

解決すべき課題

- (1) 愛宕祭の若手参加者・後継者不足



立山制作の拠点

完成した立山に来てくださった地域の方々

大学の役割

愛宕祭とは、京都の愛宕神社を中心に広がる愛宕信仰のお祭りであり、火伏の神を祀る夏の行事である。愛宕祭は、伝統行事として全国各地で受け継がれているが、祀り方は様々で、大和八木では各町内がそれぞれ祠と神へのお供え物である「立山」を家や店の前に祀る。夜にはその道沿いに多くの屋台がならび、大変な賑わいをみせる。

近年、「立山」をつくることのできる町内が激減し、高度成長期の一時期は38カ所あった「立山」も、地域の高齢化や人手不足により、4カ所にまで減少した。2011年から岡ゼミの学生を中心に建築学科や有志の学生が集まり、大和八木地区内に「関西大学 八木ラボ」を開設、愛宕祭の「立山」づくりを、町内から請け負うことになった。祭り当日の約2か月前から、大和八木のまちの中に拠点をつくり活動を開始、地域の協力を得て「立山」づくりを行っている。例年祭りが近づくと、現地で5日間の泊まり込み作業を行う。地元の方々からの材料提供や子ども達に手伝ってもらい、立山の制作を行なっている。また、そこで培われた信頼関係から、学生たちが地元の小学校でおこなう「愛宕祭について」「即興立山づくり」をテーマとしたワークショップ型の授業も恒例となっている。

以上のように、この活動は愛宕祭への学生参加を通じて、失われつつある地域文化を知ると同時に、地域の祭りを次世代へ継承することを目指すものである。

成果

- (1) 地域文化の次世代への継承
- (2) 立山制作による愛宕祭の賑わいづくり
- (3) 学生が地域の伝統文化を知る

今後の展望

- (1) 「関西大学 八木ラボ」の継続的な愛宕祭への参加
- (2) 地元の若手参加者の増加

研究者の紹介



環境都市工学部 教授
岡 絵理子
(おか えりこ)

都市計画と住宅を専門としています。実際のまちの動きを、まちの人々とのかわりを通して学生たちに伝えたい、体感してほしいと思っています。

現場の声

・地元住民の方

八木町固有の伝統、文化である愛宕祭の核になる立山づくりを岡ゼミの学生さんが支えてくれています。町の子供たちに伝統文化を伝え、中南海地方最大の夏祭りの来場者を楽しんでもらう為に、地域の大人達が、その年に話題になった出来事や童話の物語を様々な材料を使い、何日も前から工夫を重ねて作り上げるのが立山です。地域で伝承されてきた立山や町の文化を次世代に伝える仕組みや方法を考える時、今年で7年目にもなる関大生の皆さんの取り組みは地域の刺激になり頼もしいかぎりです。時代の流れで祭りが変容するのは仕方ないとしても関西大学八木ラボが継続していくことを願っています。



完成した立山